「学問のすすめ」

校長　　前川　晴彦

保護者の皆様、お子様が晴れの門出の日を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。また、これまでの３年間、本校の教育活動にお力添えいただき、本当にありがとうございました。

さて 42 回生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。思えば３年前の入学式、私自身校長としてこの学校に赴任し、真新しい制服に身を包んだ、緊張した面持ちの皆さんと、体育館で対面したことを思い出します。しかし、平穏だったのはこの１日だけだったかもしれません。入学式の翌日からは、全国一斉の臨時休業に入り、それから３年間、感染対策による、様々な制限が課された学校生活となりました。皆さんは様々な変更を落ち着いて受け入れてくれましたが、どのような思いで過ごしていたのでしょうか。自分にはどうにもできない、つらい思い、悲しい思い、また、高校生活が自分の想像と違ってしまった、悔しい思い、いろいろな思いを秘めて、通学していたと想像します。

しかし、こうしたつらい生活を経験したことは、必ずしも悪いことばかりではありません。自分の仕事を持ち、社会人として生活するようになれば、逃げることが許されず、孤独と闘いながら、自分と向き合わなければいけない場面が、必ず訪れます。時にはけがをしたり、事故や災害に巻き込まれ、自由が制限されることがあるかもしれません。そうした社会に出て経験するつらさ、苦しみを、皆さんはこの高校時代に体験することになりました。「苦難にまさる教師なし」という言葉があるように、逆境は人を育てます。皆さんが、コロナ禍の３年間を糧にして成長し、将来高校生活を振り返って、「この３年間は今の自分をつくるための大きな試練だった」と、笑って話せる日が来ることを願ってやみません。

さて、日本でもようやくコロナからの出口が見えてきました。世界の歴史を見ると、大きなパンデミックの後には、必ず時代を変えるような動きが現れます。ヨーロッパで大流行したペストが中世という時代を終わらせたように、今回のコロナ禍も新しい時代の扉を開くでしょう。今、私たちが生きる時代は、世界を見渡せば、権威主義と民主主義の国家が対立し、国内では、人口減少や少子高齢化、貧困、介護など、簡単に解決できない問題が山積しています。その意味で現代の日本は、国の内外に問題を抱える「危機の時代」と言ってよいと思います。このような時代に、私たちはどのように考え、行動すればよいのでしょうか。私はそのヒントを、明治初期の日本に求めたいと思います。

当時の日本は、開国して間もない、歩き始めたばかりの国家でした。明治政府によって急速な近代化・西洋化が進められていましたが、国民の不満は爆発寸前の状態でした。また、国外に目を向ければ、欧米の列強が中国やインドネシアなどアジアの国々を次々と植民地にし、日本もいつ植民地にされてもおかしくない状況でした。まさに、国家存亡の危機に直面していた時代と言ってよいでしょう。そうした時期に、時代を突き動かした本が出版されました。福澤諭吉の「学問のすすめ」です。今からちょうど 150 年前の明治５年に出版され、当時、日本人の 10 人に１人が読んだと言われるほどの、大ベストセラーになりました。皆さんも「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という書き出しの言葉を、どこかで聞いたことがあると思います。皆さん

はこの冒頭の言葉から、徳川の世が終わり、新しい時代がやってきた喜びを感じとるかもしれません。しかし、この本は喜びというより、むしろ危機の時代を生き抜くための、国民へのメッセージとして書かれました。

福澤諭吉は、今の大分県中津市の下級武士の生まれで、大阪の緒方洪庵の適塾で蘭学を学び、さらに江戸へ出て、三度海外へ渡航するという、当時としては抜きん出た思想家であり、国際人でした。福澤は実際に西洋に渡り、植民地の現実を目にして、「日本が生き残るためには、国を発展させるだけではだめだ。政府に頼って自分から考えようとしない、日本人の意識から変えなければいけない」という思いで「学問のすすめ」を書いたと言われています。ここではその中から、危機の時代を生きるための行動の指針として、４つの言葉を紹介します。

１つ目は「颯々」です。よく急ぐ時に「さっさとやりなさい」などと使いますが、「さっさ」という言葉は福澤諭吉の行動原理でした。危機の時代に何もしなければ、状況はさらに悪化します。福澤諭吉は「こだわってもしょうがないことにはこだわらない。もっと大事なことに目を向けて、できることは何でもやってみなさい」と言っています。危機の時代には未知の領域を恐れず、すぐに足を踏み出すことが大切なのです。

２つ目は「智勇」。智恵と勇気です。智恵とは学問のことを指しています。福澤諭吉は冒頭の「天は人の上に人を造らず」の後で、人間はもともと平等だが、学問をするかしないかで人生が変わる、と言っています。そして、自分の身につけたことを信じ、勇気を持って行動せよ、といいます。危機の時代であっても、学びの積み重ねから生まれる自信によって、人は恐れず行動できるということです。

３つ目は「人間交際」。この言葉は人と人とが交際することを意味します。福澤諭吉は、学ぶことで自分のレベルを上げ、その後活発に交際すれば、社会は活性化し、豊かになっていくと言います。自分が学ぶことによって、社会が発展することを、福澤諭吉はイメージしていました。学問が世を変えるということでしょう。

４つ目は「独立自尊」。自他の尊厳を守り、精神的に独立して、何事も自分の判断・責任のもとに行うことを意味します。これまでお上の考えに従えばよいと思っていた人々は、独立せよ、自分で考えよと言われ、大きな衝撃を受けました。しかし、個人として独立することは、近代人の必須の条件であり、成人を迎えた皆さんが最初に考えなければいけないことでしょう。様々な意見があふれる現代であればこそ、自分なりに考え、しなやかに対応することが求められているのです。

「颯々」「智勇」「人間交際」「独立不遜」、４つの言葉を紹介しました。私はこれからの皆さんに、これらの言葉が示すように、しっかりした考え方を持ち、前へ前へと進んでいく行動的な生き方をしてほしいと思います。アフターコロナの時代は、大きな変革の時代になるでしょう。今まで以上のエネルギーを出さなければいけないでしょう。南高校で学んだことに誇りを持ち、恐れず、たゆまず、時代にたくましく立ち向かい、自分の夢を実現してくれることを期待しています。44 回生の皆さんの、これからの人生に幸あらんことを願い、私のはなむけの言葉とします。

「４２回生に向けてはなむけの言葉」

藤田　剛

４２回生の皆さん、卒業おめでとうございます。それぞれの胸の中で卒業に対する思いは様々だと思います。「受験は団体」をスローガンに周りとともに高め合った１年は充実したものだったでしょうか？頑張れる自分を手に入れることができただろうか？もちろん、全員が第一希望に合格することを願ってはいましたが、満足している人もいれば、そうでない気持ちで進学する人もいるかもしれない。

第一希望に合格できていれば満足だろうし、第二希望、第三希望…へ進学する人もいます。己を知り、自分の力で目指せる最高の場所を目指し頑張った結果です。胸を張って進んでほしい。真の第一希望でない限り、誰でも上を目指せばきりがありません。きっと学問であれば東大や京大にはいれることが一番だろうし、医師になりたい、薬を作る人になりたい、プロスポーツ選手になりたい、有名人になりたい、という小さい頃の夢を諦めての第一希望だったのかもしれない。多くの人が今、小さい頃の夢と向き合い、夢と決別し、今の自分を見つめ直し、新しいことを探し、下した決断を尊重し応援します。前向きに頑張ってほしい。もし、大学入学後や就職した後、どうしても自分に満足出来ないのなら再チャレンジも仕方がないかもしれない。しかし、それは想像以上に難しいことで、下手すると後で後悔する選択になるかもしれない事は覚悟してほしい。成人を迎えた君達ではあるが、経済的な独立はしてません。しばらくは保護者の方と相談しながら与えられた環境を活かしながら自分を高めよう。そして、最終的には、自分自身の人生なのだから誰がなんと言おうと、あなた自身で決めれるように行動してほしい。

さて、この３年間で皆さんは様々な体験をしました。想像通りではない高校生活を前向きに取り組みました。オンライン授業からはじまり、模試、早朝・業後補習、土曜講座、スタディーサプリ、クラスルームでの連絡、体調チェックの入力、三密の回避、文化祭、体育祭、遠足、修学旅行、球技大会、紙飛行機、濃厚接触、自宅待機、…。延期や中止、縮小にも負けず、変化する中、そして限られた自由の中で、全力で取り組んでくれました。学校生活に真剣に取り組む姿を見て、頼もしさすら感じました。また、君たちの多くは部活動にも最後まで積極的に取り組んでくれました。多くの部で県大会出場を果たし、本年度の総合体育大会尾張支部で総合６位を獲得できたのは、全ての部活動において、部活動に悩み、部活動に苦しみ、部活動を楽しみ、仲間と励まし合い、部活動を諦めず、勝利に向かって努力した最上級生である君たちがいたからだと思います。この３年間で得られたこれらの体験は、君しか味わうことができない唯一無二の体験です。一生の宝物にしてください。

これから旅立っていく皆には、仲間と過ごしたこの高校三年間の学習・行事・部活動の経験から得られたことをぜひ忘れずにいてほしい。大変な時間を一緒に乗り越えたからこそ得られたものが、君たちを繋いでいます。人と人の繋がりは安定を築き、安心をもたらします。不安定な時代である今、この繋がりを大切にして次のステージ、その次のステージでも頑張ってほしい。皆さんの将来に大いに期待しています。

前へ！　上へ！

１組担任　　宮田　敬

今日まで駆け上がってきた、人生という「山」の高さからの眺めはいかがであろうか？少なくともこの１年の上り坂は今までと比類なき険しさであっただろうから、目に映る景色もきっと格別であろう。

しかし、４月からも坂は続く。上がれば上がるほど、気温は下がり酸素は薄くなる。でもきっと、今見える景色よりもっと素晴らしいはず。それが見たいのであれば、これからも前をみて上をみて進め。　絶景は君たちを待っている。

卒業、おめでとう。

自分勝負

２組担任　橋本　記江

卒業おめでとうございます。コロナ禍から始まり、不安なことや悔しいことも沢山あったと思いますが、皆さんの笑顔とともに三年間、一緒に過ごすことができたことを嬉しく思います。ここから新しい生活が始まって行きます。新しいことを始めるには勇気が必要で、不安もあると思いますが、臆せず前に進み続けて欲しいと思います。立ち止まってしまったら、それ以上の成長はありません。与えられた環境の中で、どう動けるか。自分次第です。これからも頑張り続けてください！応援しています。

卒業おめでとう

３組担任　青野紗季

ご卒業おめでとうございます。そして３年間ありがとう。これからは一人一人が違った道を歩むことになりますね。人生という道で色々な人と出会い、色々な経験をしてください。道中に少しでも気になることがあれば、どんどん挑戦してみてください。新しい自分に出会えるかもしれません。そして自分のことがもっと好きになるかもしれません。あなたが創る一度きりの人生です。なによりも自分自身を大切に、素敵な人生を歩んでください。

《幸せ》ということ

4組担任　木村　友子

人の幸せ不幸せを決めるのはその人自身である。人が自分に対してどのような言葉がけをするかによって、人生の質を左右することが、科学的にも証明されている。自分と前向きな会話ができれば、気分が晴れ、自信も増し、生産性が高まり、結果的に人生が豊かになるらしい。「最悪だ」「どん底だ」という言葉を使い、自分が幸せになるのを待ちながらぼやく人間になるか、「明日があるさ」「かかってこい」という言葉で自分を鼓舞し、自分で幸せをつかみにいく人間になるか、君はどちらを選ぶ。

2004年の出来事

5組　担任　木村　朱美

気象庁のデータによると、2004年は現在までで最も多く台風が日本へ上陸した年で、一年で10回もだそうです。その時、お母さんが暴風の恐怖を感じながらも、微笑んだりぐずったりする幼き天使であった皆さん、あるいは膨らんだお腹を大切に抱き守っていたことと思います。私自身もおびえながら我が子達を見守っていたことを思い出します。

皆さんへお願いです。将来何が待ち受けているかと不安が募る地球環境の中であっても、学び続けてください。無知であることは、自分も人も自然も傷つけるからです。自分を育ててくれたすべての人・事象に感謝しながら、大切な人を守り抜ける強く優しい大人になるために、学び続けてください。心から応援しています。

卒業おめでとう。三年間ほんとうにありがとう。

「思い出」

6組担任　稲垣　卓

思い出とは，未来という目的地へ旅するための手荷物である。
この手荷物は，重すぎてもいけないし，軽すぎてもいけない。
重すぎれば，目的地へ向かって動くのが辛く感じてしまう。
軽すぎれば，中身のない旅で終わってしまう。

自分が持てるだけの思い出を持って，次の旅へ向かってください。
行き先は違うけれども，目指す場所はきっと光あふれています。卒業おめでとう。

それぞれのストーリー

8組担任　辻　悟

『人生は一冊の書物によく似ている。愚かな者はそれをパラパラとめくっているが、賢い者はそれを念入りに読む。なぜなら彼は，ただ一度しかそれを読めないことを、知っているからだ。』…ジャン・パウル（ドイツの作家）

時に様々な解釈とともに取り上げられるこの言葉。高校卒業時点の君たちの本は、まだほんの序章が終わったばかり、これからが本編のスタートです。高校卒業、おめでとう。どんな素敵で個性的なストーリーを君たちが描くのか、とても楽しみですね。

「自分のできるを信じる」

3年5組　長谷部陽映

在校生の皆さん、今までありがとうございました。
本日、私たち42回生は卒業します。

長いようで短かったこの三年間には、日常生活の些細なことから、大学受験の重大なことなど、選択を迫られる場面が多くあります。そんな時に、私がいつも意識していたことは「自分のできるを信じる」ということです。難しい、きついと感じたとしても、少しでも自分ができると思えたなら、その道を選択するということです。たしかに、選んだ道が全て良い結果となったわけではありませんでした。しかし、後悔はしませんでした。成功を目指して努力したことには変わりありませんし、妥協の道を選んだときより、確実に成長したと感じることができるからです。また、そんな道を選んだ人の周りには、同じように自分のできるを信じて進んできた人がたくさんいます。目標の達成に向けて切磋琢磨し、励まし合った仲間は一生の宝になります。

在校生の皆さんにも、これから多くの選択が迫られると思います。そんなときには、自分のできるを信じて後悔しない道を選んで下さい。

大好きな先輩方へ

2年1組　長尾　脩杜

三年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。
行事や部活動、学校の顔として、いつもかっこいい姿を見せ続けてくれた先輩方。
僕たちの学校生活は先輩なしでは語ることができません。部活動では期待を胸に秘めつつも少し不安だった僕たちに優しく寄り添って下さり、部活動の楽しさを教えてくれました。
夏の大会の力の限り最後まで戦い抜く先輩方の姿は、僕たちの憧れでした。

体育祭では、先輩方が群団をまとめ上げ、各群団の持ち味や個性を最大限に生かすことで、誰にとっても最高の思い出となったのではないでしょうか。
そして最後に、“僕の学校生活”を語るうえで何よりも欠かせないのは、生徒会活動を通して関わってきた、たくさんの先輩方です。僕は１年生の時会計として生徒会に入ったのですが、初めての生徒会ということと生徒会のメンバーが僕以外全員２年生だったこともあり、当初はとても緊張していたことを覚えています。しかし、生徒会メンバーの先輩はいつも楽しく前向きで、僕の緊張もいつの間にかどこかになくなっていました。
そんな大好きな先輩方も常に楽しくというわけではなく、仕事の時にはしっかり気持ちを切り替えて真摯に仕事と向きあいます。そんな先輩の姿がとてもかっこよく、今でも昨日のことのように思い出すことができます。三年生の先輩方がすごいのは、それが生徒会に限った話ではなく、学年全体でそのような雰囲気があるということです。
会計の次に会長となって新しい生徒会の活動をスタートした時、当初は今までずっと頼りにしてきた先輩方がいないことがとても不安でしたが、行事の時にはたくさんの先輩から応援の声や、「この仕事手伝おうか？」などのお声がけをいただき、この２年間を振り返ると、最後まで三年生の先輩方に助けられっぱなしだったな、と思います。そんな頼れる大好きな先輩方が卒業してしまうのは、お祝いの気持ちがある反面、少し寂しい気持ちもありますが、いつまでも頼りきりではだめなので、これからは僕たちがこの南校を引っ張っていきます。
三年生の先輩方、ご卒業おめでとうございます。

広報活動に携わって

広報委員長　　飯吉　裕子

広報委員一年目。PTA だより作成の為、南校祭と体育祭を見学させていただきました。生徒達の一生懸命な姿やたくさんの笑顔に感動したことを覚えています。三年目の南校祭、PTA 役員の皆さんが時間をかけて企画や準備をしてくださった模擬店。当日少しですが、お手伝いさせて頂いたことも私にとって良い思い出です。

広報活動に携わり、コロナ禍で全ての学校行事は縮小されたり、多くの制限があったりしましたが、それでも行事を楽しんでいる生徒達の姿を間近に見られたことがとても良かったです。最後に、活動に協力して頂いた先生方、PTA 役員・理事の皆さん、三年間ありがとうございました。